

近世大乘院庭園の含翠亭について

はじめに 近世大乘院の建築で唯一現存するのが、明治25年（1892）に帝室奈良博物館（現在の奈良国立博物館）に移築された茶室「八窓庵」である。八窓庵は、少なくとも明治前期には「含翠亭」と呼ばれていた。また江戸時代中期に描かれた指図には、八窓庵とよく似た平面をもつものがある。さらに奈良の郷土史家・藤田祥光が昭和10年頃に著した『大乘院』に現れる「閑翠亭」の記述も、この指図と整合する。本稿ではこれらについて検討し、八窓庵の建築的意義について述べてみたい。

八窓庵の現状 現状の八窓庵は、東を正面とし、台目床を備えた四畳台目の茶室と、その背後にいずれも三畳の、相の間と水屋（室名は仮称）を配する（図44）。外観は茶室部分と相の間を茅葺、水屋を棧瓦葺とする2棟からなる（図45）。屋根まわりや天井の材料は取り替えられており、屋根の形式も変更されている可能性がある。ただし、柱や内部の横架材の多くは当初材とみられ、現状の平面は当初の形式をとどめるとみられる。

ところで、台目床の背後（南）には一畳を配し、南面に沓脱石を置いてここから出入りするが、縁や土間もなく床上に上がる不自然さがある。またこの部分は床下を板でふさいでいる。したがって、この部分には、別の建物が接続し、板床が連続していたと考えられる。

真景図にみえる含翠亭 大乘院庭園の四季の名所を一

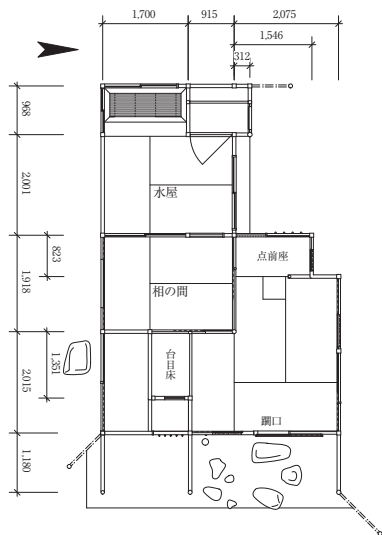


図44 八窓庵現況平面図 1 : 150

枚の図に描き込んだ、いわゆる大乘院庭園四季真景図（以下、「真景図」と略）と呼ばれる絵画資料が、現状で6幅が知られている。いずれも大乘院庭園を北西上空から俯瞰した図で、幕末から明治前期にかけて製作あるいは書写されたものである。

そこにはいずれも鬼園山の南麓に二重屋根の含翠亭が描かれている。もっとも精緻な表現をもつ国立国会図書館所蔵の「南都大乘院林泉真景」（明治26年、宮崎豊広筆、図46）をみると、二重屋根の建物のほかに、背後に伸びる建物と、側面に伸びる建物の計3棟が描かれている。屋根材は、図中の他の建物の表現などと比較しても、少なくとも茅葺ではなく、杉皮葺と推定される。

現状と比較すると、屋根に変更がありそうな点と、現状の南面に建物が続きそうな点が共通している。

『大乘院』の閑翠亭 藤田祥光（1877～1950）が昭和10年頃に著した『大乘院』第60項では「室町時代造営建物并二庭園明細図」として、室町時代以来の建物と庭園が描かれた図を買い取ったとして、その建物等を書き上げるなかに、「閑翠亭」の記述がある。すなわち、「御上段二畳、上御居間七畳、同次之間六畳、同次之間四畳、御数寄屋五畳〈大目〉、御水屋三畳、次之間三畳、御待合、沙廊、三畳之間」とみえる。

「御数寄屋五畳〈大目〉」が四畳台目の茶室とすれば、これと御水屋三畳、次之間三畳の構成は、現在の八窓庵と共通する。加えて、御上段・上御居間・次の間などの部屋が付属していたことがわかる。

建物の書き上げは、御宸殿、内御殿、東林院殿、閑翠亭、別殿の順で、真景図の建物配置から、南から北へ記したらしい。この図の年代は台目畳が現れることから室



図45 八窓庵の現状（南東から）

町時代までは遡らず、上限は近世初期とみられる。

指図にみえる「数寄ヤ」 宝暦6年(1756)に編まれた『肝要図絵類聚抄』(興福寺蔵)には、「隆遍代大乘院御殿建物指図」(以下、「指図」と略)と呼ぶ、隆遍(1721~1777)が第54代大乘院主であった宝暦年間(1751~1764)の大乘院の建物群の指図(平面図)が収録されている。南から北へ、寝殿、内御殿、東林院殿が配され、その北、建物群の東北端に図47に示した建物が描かれている。すなわち、北端に「数寄ヤ」があり、その南西にも「数寄ヤ」がみえ、さらに「上段」、「御書院」などの語が書き込まれた平面がわかる。

このうち2つの「数寄ヤ」からなる平面は、現在の八窓庵(図44)とほぼ同じで、建具の表記も概ね共通する。

さらにこの平面は、藤田祥光『大乘院』の閑翠亭の書き上げともほぼ一致する。「御上段二畳、上御居間七畳、同次之間六畳、同次之間四畳」は、指図中の「エン」や「クレエン」などの部分を除いた平面とみごとに一致するのである。その他も指図と『大乘院』の記述は一致する部分が多いが、一部で名称が異なる部分や細部が整合しない部分があり、藤田祥光が買い取ったという図は、この指図とは異なると考えられる。

閑翠亭と含翠亭 以上から、八窓庵と含翠亭は同じ建物であり、『大乘院』の閑翠亭と指図の「数寄ヤ」などの一群は同じ建物と考えられる。では、閑翠亭と含翠亭は同じ建物であろうか。

藤田祥光『大乘院』第72項「安政年間大乘院御殿御茶事」には、安政年間(1854~1860)に閑翠亭で茶会を催した記事がみえ、これは真景図の年代と重なるので、その可能性はある。真景図には東林院殿と書き込みのある



図46 「南都大乘院林泉真景」にみえる含翠亭
(国立国会図書館デジタルコレクション)

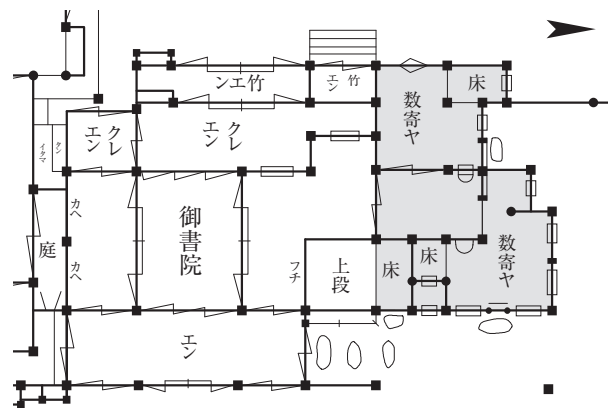
建物は描かれているが、その北方に続く建物は不明である。含翠亭の立地は鬼園山の南麓にあたり、位置的には近いが立地は閑翠亭とは異なるとみられる。これらが同じとすれば、指図の閑翠亭が、幕末頃までに移築されたこととなる。また異なるとすれば、きわめて近接してほぼ同様の建物が建てられていたことになる。図46で側面に延びる建物は、指図中の「上段」や「御書院」の一郭と考えられ、ここでは前者の可能性、すなわち閑翠亭と含翠亭、ひいては八窓庵は同じ建物と考えたい。

おわりに 八窓庵の建立年代やその作者については、俗説の域を出ない。上記の推定が正しいとすれば、建立年代は少なくとも宝暦年間まで遡る。また、八窓庵は古田織部(1543~1615)好みの茶室と言われるが、小堀遠州(1579~1647)の作風も認められることが指摘されている(中村昌生『茶室の研究』墨水書房、1971)。作風がただちに建立年代に結びつくわけではないが、近世前期に遡る可能性も否定できない。また八窓庵に類似する平面をもつ茶席があることも指摘されており(前掲中村著書)、著名な茶室を本家とした写しの可能性もある。いずれにしても、現時点では建立年代を不明とせざるをえず、今後の八窓庵の修理工事による調査などで、上記の仮説が解明されることを期待したい。

2018年3月に奈文研が刊行した『名勝旧大乘院庭園発掘調査報告』では、大乘院庭園から移築した伝承もある今西家住宅についても触れた。あわせて参照されたい。

八窓庵の現地調査にあたっては、奈良国立博物館の吉澤悟氏のご協力を得た。文献については奈文研客員研究員の谷本啓氏から多大なご教示を得た。記して謝意を表したい。

(箱崎和久)



アミは八窓庵相当部分 右が北。方位記号は筆者挿入
図47 隆遍代大乘院御殿建物指図の東北部分の描き起こし